

# 東日本大震災・被災支援ネットワークから(1)



## 復興・被曝と祈りの力

日本基督教団仙台市民教会 主任担任教師  
仙台キリスト教連合 被災支援ネットワーク 事務局長  
特定非営利法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ 事務局長

川上 直哉

また、3月11日が近づいてきます。今度は3度目の「3・11」です。「三年後」ははるか先に思えました。でも、もう、3年が経とうとしています。復興は進んでいません。破壊の規模が大きかったので、遅遅として見えますが、復興していません。しかし、だから、分断と諍いが起こっています。

取り残される人がいて、孤立感と不安が人々を苛んでいきます。高齢者は、元の街並みに憧れます。若者は、「冗談じゃない」と憤っています。「復興バブル」があり、全てを失ったままに捨て置かれる人がいます。放射被曝の不透明な

現実が広がっています。被曝しても、健康被害は「3年間」顕在化しないから「大丈夫だ」と、語られています。その言葉は魔法のように、私たちが安心させてくれました。しかし、その魔法はもう切れません。3年が経つのですから。私たちは、この3年間、「教会にできることがある」ということを知らさず、驚かされ続けてきました。さて、今、どうでしょう。落ち着いて、これから「教会にできることがある」のか、考えています。そのために、どうして「教会にできることがあった」のか、考えてみます。

東北の教会は、本当に小さいのです。仙台にあるいくつかの例外を除けば、本当に、教会は小さい。そして高齢化しています(それは大きな教会も同様です)。しかし、教会は被災し痛んだ地域に仕え、福音を伝え、人々の魂に希望の灯をともし続けた。不思議です。端的に、教会の力は、祈りなのだと思えます。祈るとき、私たちは活動を止めます。おしゃべりをやめ、読書をやめ、静まって神様に語りかける。そうして聞こえる友の祈りのうちに、その魂の呻きを聞き取る。そして、神様がその呻きに心動かされる気配を感じるのです。

「何もしない」ことで、世界が動き出す。それが祈りの不思議です。朝禱会の働きを思い出します。私たち仙台の教会は、仙台キリスト教連合を器として、世界と直結し、被災地に密着しました。仙台キリスト教連合とは何か。すでに40年近い歩みの中で、私たちは一つの結論に到達しています。それは、「祈る集まり」であるということです。仙台朝禱会は、いつも、仙台キリスト教連合の中核でした。今もそうです。そこに、「教会にできること」が育まれます。日本中の朝禱会でも、同じ力が静かに育まれていることでしょう。その力が、近くまた、必要と



心に残っている言葉

我モーセと偕に在しごとく汝と偕にあらん  
我なんぢを離れず汝を棄じ 心を強くし  
かつ勇め…我なんぢに命ぜしにあらざや  
心を強くしかつ勇め汝の凡て往く處にて  
汝の神エホバ偕に在せば懼るる勿れ  
戦慄なかれ ヨシュア記 1章5・6・9節(文語訳)

体弱く小心であった私は、多くの教会の方々に祈られ、成長するとともに、亀水松太郎牧師から誕生の時与えられたこの言葉が理解でき、神様が常に伴って下さるとの確信を与えられました。高校生の時、「それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。」(コリント人への前の書1章18節)のみ言葉によって、受洗の決意を与えられ、今日まで主の恵みのもと、生かされていることを感謝しています。

大阪朝禱会世話人代表 米田 昭三郎  
(日本基督教団 大和キリスト教会)

